

令和7年度 学校経営方針

I 実態把握

(1) 国・県・市が進める教育

*下線は校長による

国	第4期教育振興基本計画の推進 1 <u>持続可能な社会の創り手の育成</u> 2 <u>ウェルビーイングの向上</u> (1) グローバル化する社会の持続的な発展に向けて<u>学び続ける人材</u>の育成 (2) 誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す<u>共生社会</u>の実現に向けた教育の推進 (3) 地域や家庭で<u>共に学び支え合う社会</u>の実現に向けた教育の推進 (4) 教育デジタルトランスフォーメーション(DX)の推進 (5) 計画の実効性確保のための基盤整備・<u>対話</u>
県	静岡県教育振興基本計画の推進 「有徳の人」の育成 ○知性・感性・身体能力など、自らの個性に応じて「才」を磨き、<u>自立</u>を目指す人 ○多様な生き方や価値観を認め、<u>自他を大切にしながら</u>「徳」を積む人 ○「才」を生かし「徳」を積み、<u>社会や人のために貢献する</u>「才徳兼備」の人 <基本方針> 1 「文・武・芸」三道の鼎立を目指す教育の実現 「知性」・「感性」を磨く学びの充実 「<u>技芸を磨く実学</u>」の奨励 学びを支える<u>魅力ある学校づくり</u>の推進 2 未来を切り拓く<u>多様な人材</u>を育む教育の実現 <u>多様性</u>を尊重する教育の実現 グローバル・グローバル人材の育成 3 生涯を通じた学びの機会の充実 全世代に対する<u>学びの機会</u>の充実 誰もがともに学ぶことのできる機会の充実
市	菊川市教育大綱の推進 豊かな学びで<u>歩み続ける人</u>づくり 1 自立した人 知・徳・体のバランスの取れた「生きる力」を持つとともに、<u>自ら学び、考え、行動し、</u> 失敗や壁にぶつかることを恐れず、チャレンジできる人 2 思いやりのある人 生き方や価値観の<u>違い</u>を認め合い、他人を思いやる「豊かな心」を持つとともに、コミュニケーション能力に優れ、<u>互いに高め合う</u>ことができる人 3 いつまでも学び続ける人 様々なことに興味・関心を持ち、生涯にわたり意欲的に学び続け、<u>社会の変化に</u> 対応できる柔軟さや、未来を切り拓く力を持ち、輝き続ける人

(2) 本校を構成する各主体の姿

生徒	○重点目標「<u>自ら気づき→行動する</u>」を意識している生徒が多い ○行事や部活動に<u>一生懸命</u>取り組む ○<u>落ち着いた学校生活</u>を送っている ▲<u>悩み</u>(学習・人間関係・家庭)を抱えている生徒が少ない ▲他者の主体性を<u>尊重(他者理解)</u>できる生徒をさらに育成したい ▲<u>社会へ繋げる力</u>を伸ばしたい(これが点数取得学力のアップにつながる)
保護者	○教育活動に<u>協力的</u>である(菊東中サポーター) ○保護者同士の<u>つながり</u>が強い ▲時に<u>親子関係</u>の希薄さを感じさせられることがある ▲<u>外国籍生徒の保護者</u>との連携をさらに強めたい
地域	○<u>協力的</u>で、学校のよき理解者である(菊東中サポーター) ▲<u>少子高齢化</u>が進み、防災面等で不安がある
校舎 教職員	○校内は<u>掲示物の充実</u>や<u>きれいさ</u>が保たれ、学びにふさわしい環境である ○教職員間に<u>協力性・同僚性</u>が見られる ○教職員の<u>授業改善意欲</u>が強い ▲校舎内には<u>修繕が必要な箇所</u>が多々ある ▲<u>特別支援教育</u>に関する教職員の指導力向上と新たな支援体制の確立 ▲業務に対する「やめる・へらす・かえる」のさらなる<u>意識改革</u> ▲<u>持続可能な教育計画</u>、学校行事の検討

2 令和7年度学校経営デザイン

(1) 学級数・生徒数

学年	学級数	通常学級生徒数	特支学級在籍数	合計
1年	3	102	知的3 自情1	106
2年	3	97	知的2 自情2	101
3年	4	112	知的0 自情3	115
特別支援	2		知的5 自情6	
合計	12	311	11	322

(2) 目標

ア 校訓

躍動 具体的に生き生きと行動する生徒(昭和53年 原文より一部抜粋)

イ 目指す学校像

在校生が、小学生が、保護者が、地域が、そして職員が
行きたい(行かせたい)学校No.1

ウ 学校教育目標

自己指導能力を身につけた生徒の育成

○主体的に問題や課題を発見し解決していく生徒

○他者の主体性を尊重できる生徒

○自分の行動を決断し実行できる生徒

エ 重点目標

自ら気づき→行動する

中学生が送る中学校生活3年間は、あっという間に過ぎてしまう。この3年間でどの生徒にとっても充実したものにしたいと考えたとき、私たち教職員が意識すべきことは、「魅力ある学校」づくりである。「今日も楽しかった」「明日はどんなことが待っているのだろう」「早く明日にならないかな」。こんな思いが広がる学校こそ「魅力ある学校」であり、これが実現すれば、学校現場が抱える喫緊の課題は一つ一つ解決に向かっていくと信じる。

そんな「魅力ある学校」を本校では、「行きたい(行かせたい)学校No.1」と言い換え、これを目指す学校像として掲げた。では、生徒にとって「行きたい学校」とはどんな学校か。また、保護者にとって「行かせたい学校」とはどんな学校か。アンケート結果の集計から出てきたキーワードは「個性尊重」であった。教職員が生徒の個性を尊重し、生徒が生徒の個性を尊重する、つまり、他者の主体性を尊重し教育活動を実践していくことが重要である。

この「他者の主体性の尊重」と併せ「主体的に問題や課題を発見し解決していく力」「自分の行動を決断し実行できる力」こそが教育活動を進める中で生徒たちにつけさせたい力、「社会に繋がる力」言い換えれば「自己指導能力」である。具体行動目標となる重点目標に「自ら気づき→行動する」を設定し、生徒たちを導きたい。

菊東中関係者全員で取り組む重点目標の実践及び積み重ねが、学校教育目

標達成へと近づき、目指す学校像へと向かっていく。「魅力ある学校」づくりは、この営みの中にある。

(3) 実践の4本柱(二活動二向上)

ア 自治活動

活発な生徒会活動を展開していく。まずは、生徒代表委員会から専門委員会への流れを大切にする。専門委員会では常時活動を確実に積み重ね、ステージ目標に合った特別活動を組んでいく。また、ステージに応じて重点委員会を決め、その委員会の特別活動を全校で盛り上げていく。複数委員会によるコラボ企画も活動の一つとする。

見逃してはいけないのは「過ごしやすさ向上委員会」の活動である。令和6年度10月に発足したこの委員会は、校則の見直しを手がける、まさに生徒の手による学校づくり推進委員会とも言える。今後、メンバー再編を繰り返しながら、菊川東中学校をアップデートしていく。

週3回の清掃活動は黙って時間いっぱい取り組む「黙働清掃」とする。「行きたい学校No.1」を目指し、自分たちの学校は自分たちできれいに保つ意識を根付かせていく。

自治活動を通して、「決断し実行できる生徒」の育成に努める。

イ 自己期待感向上

なりたい自分を描き、挫折しつつも前に向かって歩いていく。「自分にはやりたいことがある」「自分の将来が楽しみでならない」。そんな自己期待感をもてる生徒が増えれば、学校はさらに活気であふれるはずだ。そのためには、「自分には良いところがある」「弱い面も含めて自分が好きだ」「自分は周りから必要とされている」という自己肯定感、自己有用感を高めていくことが重要である。

まずは、生徒の良い表れを声に出し積極的に賞揚していく「賞揚のボイスシャワー」を校内に広げていく。また、重点目標「自ら気づき→行動する」にふさわしい行動を称える「躍動賞」を不定期的に授与する。「賞揚のボイスシャワー」を表彰へと繋げ、生徒の自己肯定感・自己有用感向上の一助としていく。

さらに、PDCAサイクルを生かし、ステージ振り返りタイムを時間をとって丁寧に行う。生徒アンケート結果を集計、集約し、生徒にフィードバックさせ、結果に対する分析を生徒同士で行わせることで、ここまでの頑張りとこれからの意欲を確認していく。

学級経営・学年経営においても生徒の自己肯定感や自己有用感を高める行事や集会、たよりの発行に取り組む。あわせて、特別支援教育の理念を大切にし、「視覚化」「焦点化」「共有化」の視点を取り入れたインクルーシブな環境作りも自己肯定感・自己有用感向上につながるものとして全校で取り組んでいく。

自己期待感を向上させるための取組を通して、「他者の主体性を尊重できる生徒」の育成を図る。

ウ 探究活動

「社会へ繋がる力」とはどんな力か。点数取得学力もその一つかもしれないが、決してそれだけではない。探究活動の活動過程である、発見、設定、選択・決定、まとめ、発信、自省を通して、自己指導能力、つまり、「社会へ繋がる力」を鍛えたい。そのため、総合的な学習の時間を「生き方学習ー探究活動ー」とし、3年間の総合カリキュラム、さらには、総合を軸としたカリキュラムマネジメントシートを作成し、探究活動を充実したものとする。

探究活動を通して、主に「主体的に問題や課題を発見し解決できる生徒」の育成を目指す。

エ 授業推進力向上

授業者とは、授業をするのは、授業を推進していくのは一体誰なのか。教師が教室の前に立ち、いつも生徒をゴールに向かって引っ張っていく授業から脱却した本校の授業に当てはめると、授業者とは、ずばり生徒と言える。とするならば、今後授業推進力を高めていくべき対象は生徒である。とは言っても、学習すべき学年教科内容を把握している教師には年間指導計画、合わせて各教科単元の単元計画(構想)の作成が必要不可欠となる。生徒が自走する授業を目指す時、授業推進力は、教師にも生徒にも求められる。

教師は、評価の種類、評価のタイミングを含んだ単元構想の工夫に着手する。そこには、単元を貫く課題の吟味、個別最適な学びと協働的な学びの一体を意識した授業形態の在り方等も視野に入れ検討する。一方、生徒は、課題解決に向け学習プログラムを作成する。自力で取り組むかグループで取り組むか。活用すべきはデジタルかアナログか。自己選択し、自己調整しながら粘り強く学びに向かっていく授業の実現を目指す。

授業推進力向上の先には、学力(知識・技能、思考・判断・表現、学びに向かう力・人間性)向上が待っている。授業推進力向上を通して、学校教育目標に迫る。

3 勤務環境改善

(1) 勤務実態

ア ミライム(将来的にはGoogle Workspace)による、職員の出退勤時刻の把握と管理

イ 朝の昇降口解錠7時40分、完全下校最長17時15分

ウ 計画的な4時間・5時間授業日の設定

エ 軽重をつけた教育課程、教育活動

オ 計画的年休の取得

(2) 校務の整理

ア Google Workspaceの活用

イ スクールサポートスタッフの活用

ウ 「生活環境部」「学習環境部」の2環境部による教育活動の推進

- エ ガイドラインに沿った部活動運営
- オ ペーパーレスを意識したデータやたよりのデジタル化
- カ 会議時間最長1時間

(3) 保護者・地域との連携

- ア 生徒数減少に伴う、PTA活動組織と内容のさらなる改編

R(年度)	7	8	9	10	11	12	13	14	15
全校生徒数	323	347	352	357	322	319	298	309	275

- イ ゲストティーチャー(GT)や地域ボランティアの活用
園芸ボランティア 図書館ボランティア まなび隊 よりそい隊

(4) 教職員の意識改革

- ア 前年度踏襲提案からの脱却
- イ 授業準備、教材研究の時間を確保するための「やめる・へらす・かえる」
- ウ 一日の、一週間の業務スケジュールの作成(仕事の優先順位の決定)